



ガザはどうなっているのか

爆撃から1か月後のガザを訪問しました。町のあちこちに破壊の後はそのまま残されているものの、予想以上に早く爆撃前の状態に戻っている感じがしました。2009年の侵攻の後、建設資材もガラスもなくて、がれきが1年以上放置され、半年くらい窓ガラスがないところがほとんどだったのですが、今回は修理されているところが多かったように思いました。イスラエルによる経済封鎖もだいぶ緩和されて商店の品物も豊富で、夜間の人通りも増えています。

エジプトの民主化後、ムスリム同胞団の政権が作られたこと、カタルをはじめとするアラブ諸国からの支援を得ていることなどは、ガザのハマス政府にとって大きな追い風になっていて、今回イスラエルとの停戦を「勝利」として、直後にはハマスの最高指導者で海外に住むメシャル政治局長がガザ入りをしたそうです。実際、ガザ住民は以前よりも簡単にエジプトに行けるようになっていて、エジプトを経由して海外に行くケースも増えています。

またガザ攻撃からほどなく、国連総会でパレスチナのオブザーバー加

盟が国際的に承認されたことも大きかったでしょう。世界中のほとんどの国がパレスチナを国家として承認したことを意味していますので、この件で日本が国連総会で賛成に回ったことは本当に良かったと思います。

しかし、同じパレスチナといってもヨルダン川西岸とガザの分断はますます広がり、国連オブザーバー加盟も西岸のファタハ政府が熱心に取り組んだ一方で、ガザのハマス政府は無関心だった等、相互の交流や理解は遠ざかっていて、イスラエルとの交渉や地域の発展の足かせになっています。

今回の攻撃を地元NGOのマジダさんは、「2009年の攻撃は、長年の子どもや女性への支援活動の成果を破壊しました。そこから立ち直ってようやく元の状態まで戻ったと思ったら今回の攻撃があり、今度はマイナスからの出発になります」と、一見「回復」したと見えるのは表面的なところに過ぎないと語ります。

飲み水もなくなる2020年のガザ

現在、ガザの一人あたりのGDPは「オスロ合意」直後の20年前よりも

減っていてイスラエルの約3.5%にしかならず、失業率も依然として高く、人口の8割が食糧支援を受け、4割が貧困ライン以下の生活をしているなど、ガザは外からの支援によってしか人々の生活が成り立たない状況にあります。

また、最近の国連のレポートによると、人口が急激な勢いで増加しているガザでは、現在160万人の人口が2020年には210万人になると予想されており、すでに7万戸の家屋が必要とされています。また人口増加の結果、現在よりも60%も水の需要が高まるのに、水不足に加えて地下水脈の塩水化と汚染によって2016年にはガザの地下水の100%が飲料に適さなくなります。また、2020年までに440の新しい学校、1000人の医師が必要になります。電気も需要の半分さえカバーできない状況に陥ります。

教育、福祉、生活などを見ていくと、2006年からの封鎖、2009年の軍事侵攻に加えて今回の爆撃が、脆弱なガザのインフラや経済に対して、また心理的なレベルで、致命的な一撃になっていなければよいのだが、と思わずにいられません。